

プログラム・ノート

柴田克彦

本公演は、膨大な作品を残したドイツ後期バロックの大家ゲオルク・フィリップ・テレマン(1681～1767)の**6つのカノン風ソナタ**より**第1番 ト長調 TWV 40:118**で幕を開ける。訪問先のパリで作曲された曲集(1738年出版)の冒頭を飾るこの曲は、片方が1小節遅れで同じフレーズを奏でる、急―緩―急の優美な二重奏曲。原曲のフルート2本及びヴァイオリン2本のほか、様々な編成で演奏されている。

2曲目、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)のオペラ『魔笛』**K. 620**より「**恋人か女房か**」は、亡くなる1791年に書かれた傑作オペラの第2幕で、道化的な役柄のパパゲーノが、課された試練をサボって歌う楽しいアリア。初演翌年の1792年に出版された本編曲は、原曲の愉悦感を軽妙に伝えてくれる。

ここで、近代フランス“6人組”の一人、フランシス・プーランク(1899～1963)の**フルート・ソナタ**が披露される。巨匠ジャン＝ピエール・ランパル(1922～2000)の協力を得て1957年に完成されたこの曲は、20世紀の同ジャンルの代表格。流麗さの中に哀感が漂う簡潔な佳品で、憂いと軽みが交錯する第1楽章、高雅な悲歌の第2楽章、軽妙・快活な第3楽章が続く。

かわって、近代スペイン民族主義音楽の立役者エンリケ・グラナドス(1867～1916)の**4つのスペイン舞曲**より。彼を代表するピアノ曲『スペイン舞曲集』全12曲中の4曲を、フルート&ハープ(ピアノ)用に編曲した版から2曲がオーボエとピアノで演奏される。**第2曲「アンダルーサ」**は、ギターを模した伴奏に乗って哀切な旋律が歌われる、曲集の看板曲。**第4曲「ホタ(ロンダーリャ・アラゴネーサ)」**は、スペイン・アラゴン地方の舞曲ホタの踊りと歌を描写した作品で、哀愁を帯びた旋律が繰り返される。

締めくくりは、フランスのフルート奏者ジュール・ドゥメルスマン(1833～66)とオーボエ奏者フェリックス・シャルル・ベルテルミ(1829～68)が書いた『**ウィリアム・テル**』の**主題による華麗なる二重奏曲**。イタリア初期ロマン派の人気作曲家ジョアキーノ・ロッシーニ(1792～1868)最後のオペラ『ウィリアム・テル』(1829年初演)のアリアや序曲等の旋律が連なる技巧的な1曲で、原曲ではイングリッシュ・ホルンにフルートが絡む「牧歌」が中盤に、ご存じ「スイス軍の行進」が終盤に登場する。

(しばた かつひこ・音楽評論)